

1. 活動のテーマ 「落ち葉」

- ・落ち葉の色や形の違いに気付き楽しむ。
- ・ちぎる、潰す等の感覚遊びの中で五感を刺激し、自らの創造力が広がる為。"

園庭や第二園庭、境内という身近な環境の中に木々が多く、子ども達自身が落ち葉を遊びの中に取り入れている姿が日常的に見られたため、広葉樹や針葉樹など幅広い種類があるこの環境を通して、色が変わる葉っぱや変わらない葉っぱにも意識が向けられると良いと感じ、「落ち葉」をテーマとすることにした。

また、子ども達は普段の生活の中で色や形に興味を持ち、口に出して伝える姿が見られるようになってきており、一つとして同じ物のない「自然」というものを通して、その形や色の違いを子ども達自身がそれぞれの感性の中で楽しめたら良いと感じたため、このテーマに決めた。

2. 活動スケジュール

令和7年10月～11月

- ①落ち葉探し ②落ち葉潰し ③落ち葉の色分け ④落ち葉の形遊び
- ⑤落ち葉の冠、ブレスレット作り ⑥落ち葉でままごと ⑦落ち葉の風呂
- ⑧落ち葉の貼り絵 ⑨落ち葉で焼き芋 ⑩お気に入りの落ち葉探し ⑪葉っぱ魚釣り

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

子ども達が何気なく色や形に興味を湧くように、子ども達との自由遊びのやり取りの中で一緒に気付いたり探したりするようにした。落ち葉を拾った後は入れ物に入れて落ち葉を室内に持ち込み、作りたい子が自由に落ち葉の制作を行える環境を作った。戸外では、ままごと遊びの中で落ち葉を取り入れた遊びが発展できるように、皿やコップの他、容器や箱も追加して環境を整えた。

様々な場所に様々な木が分布されていることに気付けるように、何度も園内の至る所に足を運び、子ども達自らが自然と様々な物を見つけられるようにした。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

まず、落ち葉そのものに興味を湧くよう色や形、穴の開いている物等、見た目に目を向けた声掛けをしていった。見た目に目を向けられた後は感触や匂い等、他の感覚でも一層幅が広がるような声掛けを行った。葉っぱその物に目を向けた後は、葉っぱの分類(色、形)等を自ら分類し黒い画用紙の上に置くことで、葉っぱが映える素材を選んで自ら分類を始めたいかなるような環境を作った。また、人の顔やライオンの顔、洋服の形を描き、葉っぱで髪の毛や

ヒゲ、洋服の模様などを作った。また、葉っぱを使った遊びや制作を進めるため、まずは原始的にちぎったり握ったりしていたが、そこからままごとに葉っぱを使う姿が多く見られたため、すり鉢とすりこぎを出すとふりかけ作りが盛んに行われるようになった。制作では子ども達が頭や手首に飾りを付けることが好きなので、葉っぱの冠やブレスレットを作って遊んだ。集めた落ち場の数が多くなった後は、段ボールに落ち葉を入れて落ち葉のプールを作り、落ち葉を飛ばしたり蹴ったりして遊んだ。落ち葉を乾燥させた後、焼き芋を作って、落ち葉が燃える音や燃える時の色、匂いを感じて楽しみ美味しく食べた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

保育者が「これ何色だろう?」と言っていると、子ども達から「〇〇色だよ」と教えてくれることがあり、そのようなやり取りをしていく中で「ここは〇〇色だけどここは〇〇色」等細かな色の違いに気付いて保育者に伝えてくる姿が増えていった。また、色の違いだけでなく「ハートみたいな形」「ここに穴が開いててオバケみたい」と言ったりするなど、葉っぱの様々な特徴に気付いて発言する姿があった。穴を見つけた時には「虫に食べられちゃったのかな?」と言いながら見る子もいた。

葉っぱの活動をしていく中で、保育者が葉っぱの話をしていない時にも、子ども自ら見つけて「こんなきれいな葉っぱあったよ」「見て、すごい大きいの見つけた!」と、自分の顔に当てながら大きさを伝えようとする姿などが見られた。

色分けの際には「これは〇〇かな?」と微妙な色の差を他のお友達や保育者に聞いて分けて楽しんでいる姿が見られた。葉っぱのふりかけを作っていた際にはすり鉢とすりこぎを使って無心になって砕いて楽しむ姿があり、その音や混ぜる感触を楽しんでいる様子だった。

葉っぱのお風呂をした際には、保育者や他児と葉っぱを掛け合ったり、足で蹴ったり寝ころんだりしていく中で、音や跳ぶ葉っぱの姿などを楽しんでいた。ままごとに使う際には、目的に合う葉っぱを見つけると「良い葉っぱあったよ」と保育者に声を掛けて飾りつけ、様々な料理を楽しむ様子が見られた。集めた葉っぱを燃やして焼き芋を行った際には、葉っぱが燃える様子を見て「なんか黒くなって来たね」「黒の後は白だね」と、燃えた後の葉っぱの色の差にも気付いて真剣な表情で見ている姿があった。"





5、振り返り

今回落ち葉遊びをしたことで、子ども達の色や形への興味関心が一層深まったと感じている。葉っぱは同じ木でも色が異なり、一枚の中でも様々な色が混ざっている。子ども達の中で、初めのうちは葉っぱ見て「〇〇色」と一色だけを言う姿が見られたが、次第に「この葉っぱには〇〇色と〇〇色が入ってる」と発言したり、赤でも濃淡があること、穴が開いていたりいなかったりに気付く姿などが見られ、自然物ならではの発見と物の見方ができるようになってきたと感じる。また、ちぎる、潰すといった原始的な遊びを通じて葉っぱの種類による違いを感じていた。その中で、どうしたらうまくできるのか試行錯誤する姿が見られたり、ままごとの中では全く同じ形のない自然物を使うことで葉っぱがご飯やおかず等に変わり、決まっている人工の玩具にはない創造力を育む事ができていると感じた。